

クリ「ぼろたん」は前年結果した太い枝を中心に残しせん定すると収量が安定する		
[要約] クリ「ぼろたん」は、枝の基部径が7mm、先端部径が4mmより太いと雌花数が多く収量が多い。また、前年結果枝は、発育枝より雌花数が多く着穂率も高いので、前年結果した太い枝を中心に残してせん定することで安定栽培が可能である。		
茨城県農業総合センター園芸研究所	成果 区分	普及

1. 背景・ねらい

クリ「ぼろたん」は、渋皮が剥けやすい特性を有していることから、さらなる普及推進が期待されるが、新品種ゆえ安定栽培技術が確立されていない。

そこで、結果母枝の資質（長さ、太さ）及び結果母枝の種類（前年結果枝、発育枝）（図1）と着花性・着穂性及び収量の関係を明らかにして、せん定時に残すべき枝の指標をつくる。

2. 成果の内容・特徴

1) 結果母枝当たりの総収量は、結果母枝当たりの果実数、着穂数及び雌花数と相関が高く、雌花数が多いと総収量も多くなる。結果母枝の種類では、前年結果枝と発育枝で同等である（データ省略）。

2) 結果母枝当たりの雌花数は、結果母枝基部径や先端部径が太いと多く、結果母枝長との関係は低い。結果母枝の種類では、前年結果枝と発育枝でほぼ同様の傾向である（データ省略）。

3) 結果母枝基部径では、7～8mmを境界として雌花数、着穂数及び総収量が多い（図2）、先端部径では、4mm程度を境界として雌花数、着穂数及び総収量が多い（データ省略）。

4) 結果母枝基部径7mm以上は7mm未満と比べ、先端部径4mm以上は4mm未満と比べて、結果母枝当たりの雌花数及び総収量が多い。また、前年結果枝は、発育枝より雌花数が多く着穂率が高い（表1）。

5) 結果母枝当たりの雌花数は、平成20、22年に比べて平成21年が少なく年次変動がある（図2）。

3. 成果の活用面・留意点

1) 結果母枝基部径は、基から5cm部の長径、先端部径は先端3芽と4芽の中間部の長径である。基部径7mmは、概ね鉛筆の太さ程度と考えるとよい。

2) 結果母枝は、前年結果枝を70%位、発育枝を30%位の割合で配置する。発育枝は、先端部径が4mm程度ある太い枝を中心に残し予備枝とする（翌年に結果して前年結果枝となる）。質の良い発育枝の数が確保できない場合、先端部径が細い発育枝を若干切り戻すとよい。

3) 前年結果枝を中心に残し各枝に光が良く当たるようにせん定すると、これまでの試験結果より結果母枝数は樹冠面積1㎡あたり6本程度である。

4) 結果母枝の選び方は、まず先端部径が4mm以上の枝を選び、次に基部径が7mm以上あるかを確認する。基部から先端まで充実したずんぐりした枝を選ぶと良い。

4. 具体的データ

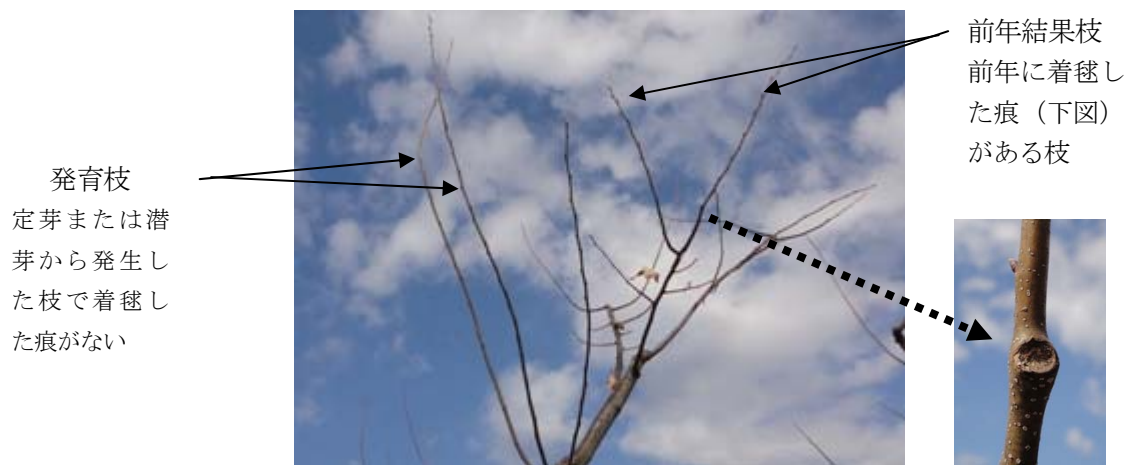


図1 枝の種類 (前年結果枝と発育枝)

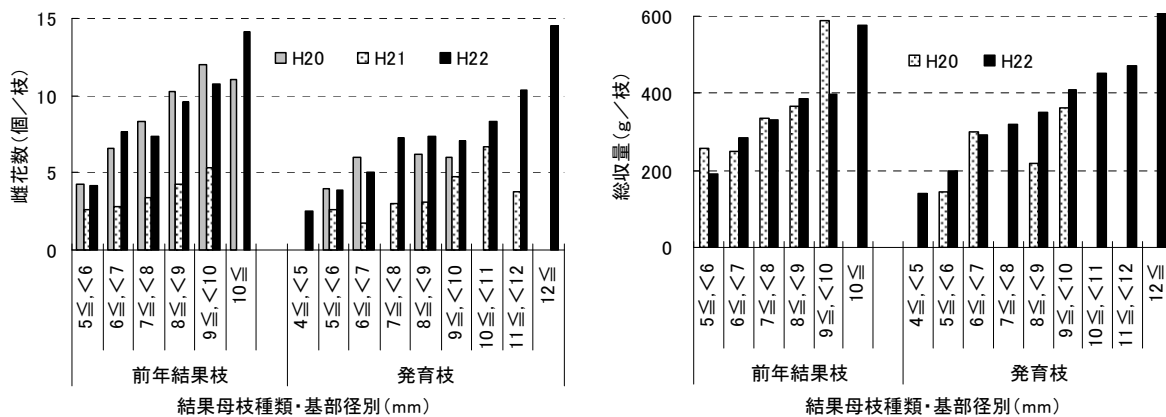


図2 結果母枝種類及び基部径別の雌花数・総収量

注) グラフに表示がない箇所は調査対象がない

表1 結果母枝径の違いが雌花数・着実率・収量に及ぼす影響 (平成22年)

結果母枝の種類	基部径				先端部径			
	区分	雌花数	着実率	総収量	区分	雌花数	着実率	総収量
	(mm)	(個/本)	(%)	(g/枝)	(mm)	(個/本)	(%)	(g/枝)
前年	<7.0	6.0	78.7	248	<4.0	5.5	78.6	243
結果枝	7.0 ≤	9.3	77.0	378	4.0 ≤	9.6	77.0	376
発育枝	<7.0	3.8	68.3	240	<4.0	4.1	67.4	303
	7.0 ≤	8.1	70.5	401	4.0 ≤	8.3	71.5	384

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

渋皮が剥けやすいニホングリ「ぼろたん」の生産利用技術の確立・平成20~22年度・果樹研究室